

候へバ、私ニハ剃難存候テ、一方ヲバ其、殘シ置、一方ハ吏部ノ御下知ニ從ヒ、剃申タルニテ候、
全晴久公ヲ侮リ奉ルニモ非、又狂氣仕タルニモ候ハズト答へケリ、晴久是ヲ聞給ヒ、暫目ヲ塞テ
御坐ケルガ、唯左右共ニ剃候ヘトゾ宣ケル、又吏部ノ驕超過シケル事多キ中ニモ、五町十町タリ
ト雖、目路ノ及所ヲバ、下馬サセラレケル程ニ、往還ノ僧俗男女是ニ迷惑シケル、

〔柳亭筆記〕中 宗祇の蚊屋附 宗祇髭

菊のちり

青柳も宗祇の髭の匂ひ哉

その女

とくくゝの匂合

髭宗祇池に蓮ある心哉

昔の人は髭を貴て、よき男の髭のなきは、池に蓮のなき如しと歌にも詠り、宗祇の髭は、香を留ん
爲とあれば、よきとり合なり、

〔骨董集〕上編上 髭男

見聞軍抄慶長十九年印本に云、見しは昔、關東にて、髭男をば、おもてにくてい髭男といひて、ほむるゆる
に、諸侍髭を願ひ給へり、ほう髭をば、鐘馗髭とて、諸人好む、鬼髭左右へわかれなど、古記にある
は、此髭の事なり、あごさきの髭をば、天神髭とて、武家にはさのみ好みたまはず云々、かくいへる
詞のはしに、當時の風體見つべし、古畫を見るに、髭なき男子はまれなり、昔は髭うすき者は、假髭
をさへしたりとぞ聞ける、西鶴大鑑にも、髭男のことみえたり、

〔貞丈雜記〕人物 一髭をぬき、又そる事は、近世の事也、京都將軍の時代の人は、皆常にひげ有りし也、

走衆故實に云、御成在所にて、御供衆走衆座敷替事、普廣院殿様義教 御代鎌田殿故也、大御酒あ
りて還御をも不知、御えんにあふのきてねられ候ひげを、公方様らつそくを被取、やかせられ候